

杉山先生の古稀をお祝いして

駒沢史学会会長 所 理 喜 夫

私たちの敬愛する杉山博先生が、本年めでたく古稀を迎えられた。還暦を過ぎてから体調必らずしも順調でなく、何度か生命の危険にさえ直面された先生が、それを克服し、ますます御健勝にて古稀を迎えられたこと、我々後進にとり、また学会のためにもまことに慶賀すべきことである。

本特集号は、それを慶び、駒沢史学会が主として駒沢大学文学部歴史学科で、先生の御薫陶を受けた方々に献呈論文を依頼して、編集したものである。執筆者一同、これまでの先生の公私にわたる御指導に感謝の意をこめ、また今後ますます御清栄ならんことを祈りながら献呈する。

執筆者一同との関係をも含めて、先生のこれまでの歴史は激動の昭和史の一象徴とも言えよう。先生は、大正七年（一九一八）八月四日、杉山傳一郎氏・久子さんの次男として神奈川県足柄下郡小田原町十字町三丁目に生れた。父君は海軍高級将校であった。小学校は父君の転勤に伴われながら、五度転校の後、長崎県佐世保市潮見尋常高等小学校を卒業。中学は東京に転じ、昭和六年（一九三一）東京府立第六中学校（現新宿高等学校）に入学。学校長は伯父君の阿部宗孝先生だった。なお後年、駒沢大学歴史学科の同僚教授だった箭内健次先生（大正十一年入学）・吉田常吉先生（大正十二年入学）は奇しくも六中の同窓であった。昭和十一年同校を卒業した先生は国学院大学予科に入学、二年後に同学文学部国史学科に進学する。同期に秋末一郎・太田朝男・角川源義・北構保男氏等がおられた。時代はずでに十五年戦争に突入していたが、時には予科親睦誌『文垣』の編集に情熱を燃やし、あるいは野球に興じ、

多感な大学時代をおくられたらしい。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃の報は、国学院大学の教室で聞かれた。同月二十六日第一回の繰上卒業で学窓を出た先生は筆を剣に代え、陸軍砲兵将校として泰・緬・支国境を転戦され、昭和二十一年五月十日広島県大竹港に上陸し、復員される。往時の砲兵隊は砲を牽引する馬の存在を描いて語ることはできない。馬とともに寝て、馬とともに起きる東北農村の若者たちとの五年余の軍隊生活と熾烈な実戦の体験が、敗戦後の先生の学問の一出発点となる。その研究教育の主たる場とされたのが、昭和二十一年から一年間の国学院大学図書館、昭和二十二年から同五十一年まで約三十年間の東京大学史料編纂所、五十一年から今日までの駒沢大学文学部歴史学科だった。

国学院時代に先生の学問的方向にもっとも大きな影響を与えたのは、高柳光寿・渡辺世祐・岩橋小弥太の三先生だった。卒業論文は「中世末期に於ける夫役に就いて——大和大乘院領を中心として」を課題とされた。敗戦直後に国学院大学図書館司書として空腹をかかえながら同学所蔵の久我家文書に親しんだことは、先生の個別荘園研究をさらに深めることとなる。その先生を史料編纂所に推薦したのは前記の三先生だった。先生と同時に史料編纂所に入所されたのが、稻垣泰彦・永原慶二・山口啓二の三先生である。この四人のグループが敗戦後の新しい歴史学の創造に指導的役割りを果たしたことは言う迄もあるまい。

昭和五十一年三月、木代修一先生が駒沢大学を停年退職されることとなった。その後任として先生を駒沢大学歴史学科にお迎えすることができたのは、学科構成員は言うまでもなく、大学関係者の等しく喜びとするところであった。それよりすでに十二年余、先生の薫陶を受けた教え子たちは陸続と、学会に育ちつつある。彼等こそ本記念論集の核である。先生の学問的基礎は、地域に生きた民衆を視座とする実証史学である。私たちはその学的系譜を受けつぐ。自然と人間と史を愛する先生は、またあたたかいそれらにつつまれるであろう。古稀を迎えられるにあたり、ますます御健勝にて今後も私たち後進をお導きいただききたいものである。